

立命館UCD起業家訪問

UC Davis校に留学している生命科学部の学生を対象に、アメリカで活躍されている研究者、起業家による講演会を二度開催し、自分たちのキャリアプランを考え直した。

講演会@Silicon Valley

ベイエリアで活躍されている研究者、起業家の経験を学んだ。

シリコンバレーの講演会では、生命科学部の留学プログラムでUC Davis校に留学している学生16人を集め、講演会を実施した。

講師として、ベイエリアで活躍している研究者、起業家の方々5人を迎え、ご自身の経験やその経験から重要だったこと、シリコンバレーで活躍するために必要なことについて話していただいた。



図1. 講師と参加者の集合写真

講師から積極的に学ぶ参加者

講演会では、講師によるトークの後、質疑応答、その後立食パーティー形式で食事を行い2種類の形で講師に質問できる形をとった。

質疑応答の形でも、立食パーティーの形でも非常に盛り上がり、参加者のほとんどが積極的に講師に質問をするなど、非常に実のあるものになった。



図2. 積極的に挙手する参加者

講演会@UC Davis

日本人の内向き志向について考え直した。

UC Davis校での講演会では、参加者として25人の学生が参加し、講師としてKenji Murata氏を迎え、日本人留学生の推移から日本人の内向き志向について考えた。

現在、日本人留学生の数は増えてきているが、1ヶ月未満の留学のみが増えており、長期の留学者人数は増えていない。そこから、日本人にはチャレンジ精神が足りていないのではないかと指摘された。

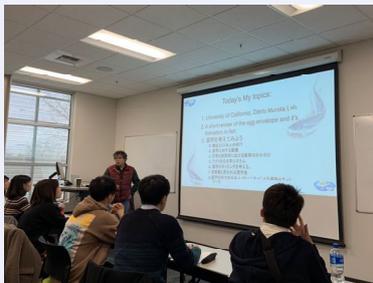


図3. Murata氏の話聞く参加者

Murata氏の研究から生命科学系の研究の多様化について学ぶ。

Murata氏はメダカの発生に関する遺伝子等の研究をしており、その研究内容から現在のバイオ関連の研究の動向や、その多様化について学んだ。

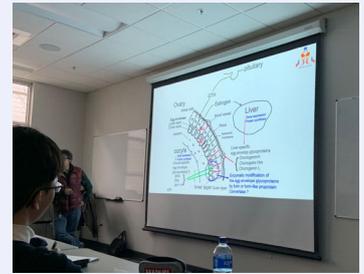


図4. 自身の研究について話すMurata氏

成果

本団体で行った活動では、主催者側である本団体の学生、講演会の参加者の学生のキャリアプランを考え直すきっかけにつながった。

また、日本とアメリカの技術者や研究者の働き方の違いについて俯瞰的な目線で学ぶことで自分たちのキャリアについてより深く考えることにつながった。

また、主催者である私たちも、知らない土地で講演会を開くにあたり、講師の方との連絡や講演会の内容や前後の準備など様々な困難や今まで経験したことがないことがあり、主催者は講演会以外でも様々な学びにつながった。

今後の展開

本活動に参加した学生から、来年度活動を引き継ぎたいと申し出た学生がおり、今後の活動を続ける可能性がある。

また、講演会を見学した生命科学部の職員が本活動を高く評価し、来年度から生命科学部が主催する企画になる可能性が出た。

また、講演会の内容についても講演会と立食パーティー以外の形式でより参加者の学びが大きくなる形があるのであれば、他の形式にチャレンジしてみるべきだと感じた。

滋賀ぎゅっとお土産コンテスト企画委員会

団体紹介

「滋賀の新たなお土産を作ろう」と食マネジメント学部の学生たちで結成された団体です。

未だ知られざる滋賀の食材・魅力を発信するため、「お菓子」をテーマに一般の方々からお土産の案を募集し、コンテストを行いました。

現在は、応募頂いた案を商品化することを目指して活動中です！

活動理念

以下の3つのことを目標に活動しています。

- ①滋賀県の魅力とは琵琶湖だけではなく食のイメージを向上させること
- ②おみやげに滋賀の特徴や生産物を使うことで、滋賀の農産物や特産物の魅力を伝える手段の一つにすること
- ③滋賀について多くを知らない地域の学生や親子などに、あったら買いたいと思われる案を出す過程で滋賀の事をより知ってもらうこと



活動概要

8月～9月 作品募集

商品化する案を募集するため案を募集。9月末までに、様々なアイデアや工夫が凝らされた約100件もの作品を受け付けることができた。

10月 書類による第1次審査

審査員の人にも参加してもらいそれぞれの専門性を生かし審査してもらい、一般の部で10案、小学生以下の子供の部で5案を選出した。

11月 プレゼンテーションによる第2次審査

会場に集まっていただき、それぞれが作った作品の意図や思いをプレゼンテーションの形式で話してもらった。審査員の人との質疑応答が繰り広げられた。また、最優秀賞や優秀賞など賞も決定した。琵琶湖や忍者をコンセプトにした作品が多く見られた。

12月より 賞品化に向けて

外部の企業の方に協力していただきながら、商品化に向けて活動中。一つの商品を作るのにあたり様々な視点から、多くの考えや工夫が凝らされていることを商談のたびに実感する。良いものが完成することをも目標に頑張りたい。

今後の活動

コンテスト実施に当たり、どのようにスケジュールをできるだけはっきり立てることと、準備していくかの大変さを今年度は知ることができた。これからは団体のメインと言えるよう活動になる。コンテスト（第二次審査）に進んだ作品の中から商品化可能なものの中から、滋賀の魅力を発信できる菓子土産を開発できるように活動していきたい。

STROPS

ースポーツ教育を通じて、開発途上国の子どもたちの可能性と夢の選択肢を広げるー

<STROPSが立ち向かう社会課題>

現在、世界には貧困や紛争により、学校に通うことのできない6~14歳の子どもが、**約1億2400万人**存在する。

(UNESCO, 2019)

多くの開発途上国が抱える教育の問題は、大きく3つある。

- ①学校が家から遠く離れている、もしくは、学校がない
- ②学校に通っても、教材や制服を買うお金がない家庭が多い
- ③紛争により、教育を受ける機会を奪われている

さらに、開発途上国では**体育が軽視**される傾向がある。

確かに文字の読み書きができることは重要である。しかし、

「**何かに夢中になって取り組む体験**」

「**仲間と協力して成し遂げる体験**」

「**できなかったことができるようになる喜び**」

を味わう体験こそが、未来を創る子どもたちには必要なのではないだろうか。

心と身体で「できた!」ことを感じられる手段の1つとして、**体育・スポーツ**は位置付けられている。

STROPSは、無限の可能性を秘めた子どもたちのため、スポーツ教育を手段とし、国際社会に貢献する。

<STROPSの活動目的>

開発途上国における子どもたちへのスポーツ教育を通じた国際貢献のあり方についての実践的研究

- ✓ 開発途上国のニーズに寄り添う支援の在り方を考え、実践する
- ✓ カンボジアの学校において継続的な指導及びスポーツ教育の向上を目指す
- ✓ 開発途上国における子どもたちへスポーツ教育を通して可能性を拡大する



<カンボジアプロジェクト>

◎活動内容

カンボジアでの活動は、**バランス・反応・リズムの体力テスト**及び**コーディネーション・トレーニング**を、カンボジアの農村部に位置する小学校に通う小学5・6年生**60名**を対象に実施した。また、トレーニングの実施による体力テストの結果の変化を確認するために、**2019年12月、2020年2月**の2回にわたり小学校を訪問した。

- ✓ 1回目 トレーニングと体力テストの両方を実施
- ✓ 2回目 体力テストのみ実施
- + α レクリエーションを実施
- 身体を動かす楽しさをより実感できるようにした

◎活動結果

- ✓ 2回の体力テストを結果を比較したところ、**バランス・反応・リズムの3種目すべてにおいて大多数の子どもたちの記録が向上した**
- ✓ 運動能力に加え、**スポーツに自主的に取り組む姿勢や協力する姿、競い合う姿が多く見られるようになった**
- ⇒ **子どもたちの成長**を目の当たりにした
- ✓ 発展途上国では運動する環境が不十分



<運動有能感テストの実施>

目的 運動前後での**心の変化**を感じてもらう

運動有能感の因子

- ①**身体的な有能感**
- ②**統制感**
- ③**受容感**

運動有能感の因子	1回目	2回目
1. 運動が楽しかった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
2. 運動が簡単だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
3. 運動が難しいと感じた	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
4. 運動が面白かった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
5. 運動が苦しかった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
6. 運動が得意だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
7. 運動が苦手だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
8. 運動が楽しかった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
9. 運動が簡単だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
10. 運動が難しいと感じた	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
11. 運動が面白かった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
12. 運動が苦しかった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
13. 運動が得意だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
14. 運動が苦手だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5

運動有能感の因子	1回目	2回目
1. 運動が楽しかった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
2. 運動が簡単だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
3. 運動が難しいと感じた	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
4. 運動が面白かった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
5. 運動が苦しかった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
6. 運動が得意だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
7. 運動が苦手だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
8. 運動が楽しかった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
9. 運動が簡単だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
10. 運動が難しいと感じた	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
11. 運動が面白かった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
12. 運動が苦しかった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
13. 運動が得意だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
14. 運動が苦手だった	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5

クメール語での調査用紙の作成

<今年度の振り返り>

今年度の活動の大きな成果は、**2回に分けてカンボジアで活動**することで**体力テストの実施、有能感アンケートの実施及び比較**できたことである。体力テストとアンケートを1回目に行い、1ヶ月間トレーニングしてもらった後もう一度実施したことから、**運動の心と身体への影響**を見ることができた。2回目では視点を変えた運動の実施ができた。さらに、この活動を通してカンボジアの教育の実情及びニーズと支援のズレなど新たな課題があることも把握できた。

<アンケートの実施>

カンボジアの農村部に位置する小中学校において、子どもたちの現状を把握するためのアンケートを約**90名**の生徒に実施した。

- ✓ 将来の夢
- 「教師」48%
- 「スポーツ選手」17%
- 「看護師」「兵士」10%
- ⇒ **夢の選択肢が狭く、偏りがあるのではないか**

<今後のビジョン>

この団体に所属するメンバー全員がカンボジアにおいてスポーツ教育活動を行った。これにより、メンバーは現地の実状を肌で感じ、新たな価値観に触れることができた。⇒**STROPS**をより大きくし、トレーニングのみならず**スポーツ競技指導**やスポーツをすることで育まれる**子どもたちの人間性の向上**に携わっていきたい。また、カンボジアだけでなく、**他の国の現状**も学び、多くの国にスポーツ教育を普及してきたい。

Tabiwa+R 活動報告

SDGs地域共創型プロジェクト

甲賀でつながる30日



ABOUT US

団体概要

Tabiwa+R (タビワプラスアール)は、立命館大学の学びのコミュニティ集団形成助成金採択団体です。滋賀県を拠点に大学生ならではの視点と方法で地域の魅力を発信しています。学生のマイプロジェクトの実現にも力を入れています。

VISON

ふるさとSDGs

自分たちの愛着のある地域を「ふるさと」とし、そこで国連が定めたSDGsの17の目標に向けてプロジェクトを実践することで、地域でSDGsをより身近に感じられるよう活動しています。今年度は甲賀市を中心とした活動の中で、関係人口の創出を目的としています。

ABOUT KOKA

滋賀県甲賀市

滋賀県の南西部に位置し、平成16年に水口町・土山町・甲賀町・甲南町・信楽町の5町が合併してできた市です。5町の地域それぞれの文化があり、甲賀流忍者や信楽のためき、土山茶など全国的にも有名です。パラリンピックホストタウンや信楽朝ドラ「スカーレット」の舞台となるなど今後、社会的にも注目されています。一方で、人口減少や中山間地域の過疎化が課題となっており、若者がどのように関わっていけるのかが今後の課題となっています。また、2017年11月には、立命館大学と包括連携協定を結んでいます。



PROJECT

甲賀でつながる30日

甲賀でつながる30日では、11月の1ヶ月間、毎日企画を実施しました。市外の方を招いて甲賀を知ってもらう企画、メンバー自身が地域ならではの問題に触れる企画、地域の方と交流する企画など、30日間を通して甲賀市内外に多くの魅力を届けられました。



SDGs(持続可能な開発目標)

CLOUD FOUNDING

クラウドファウンディング

活動資金の60万円をふるさと納税の仕組みを利用したガバメントクラウドファンディングで集めました。寄付金は、30日間の活動資金にあてさせていただきました。返礼品に協力していただいた企業の方には、30日間の企画でもお世話になりました。

30日間の拠点

ほしぞらはうす

甲賀でつながる30日では、1ヶ月間空き家をお借りして、メンバーが泊まり込みで生活しました。毎日の企画の準備から、近所の方との食事会まで、甲賀での素敵な日々がこの家に詰まっています。



ほしぞらはうす



ふるさと絵屏風 勉強会の様子



山内小学校(閉校)での企画の様子

MEDIA

メディア掲載

10/17 産経WEST
11/26 京都新聞
12/3 読売テレビ
かんさい情報ネットten.
等、計6件

FUTURE

今後の展望

- ・今回訪れることができなかったさまざまな地域の訪問・交流
→より深い潜在課題を発見し、甲賀市の未来について考える。
- ・甲賀スタディーツアー(短期留学プログラム)の提案
→若者が地域の持続性を考えるきっかけを作る。
- ・甲賀の春夏秋冬の魅力を知り、伝える。

食育促進団体パンチャピエーナ

Introduction | パンチャピエーナとこれまでの活動

○団体紹介

パンチャピエーナとは、イタリア語で「満腹」という意味です。私達は、食マネジメント学部で学んだことを食育を通して分かりやすく子ども達に伝える活動を行っています。

福井県小浜市で食育について勉強し、小学校の授業で「醤油のワークショップ」という味覚の授業を行ったり、滋賀県草津市で小学4～6年生を対象に子供達の自立性を育てるための「子どもキッチン」や「まんぶく合宿」を開催したりと、草津市を中心に活動しています。



○これまでの活動内容

2018年5月	パンチャピエーナ設立
	小浜市で食育のノウハウを学ぶ
2019年3月	小浜市での醤油のワークショップ
2019年5月	第一回子どもキッチン(以降毎月開催)
2019年8月	まんぶく合宿
2019年10月	味覚の授業

Activity① | 子どもキッチン

○子ども食堂の現状・問題

2010年頃から、子ども食堂は子どもの貧困対策として注目されてきました。ですが、現状では多くて週1度や半月に1度のペースでの提供がほとんどであり、食べるというところに対する貧困対策としては効果を十分に発揮できていない問題があります。

○子ども食堂の新しいカタチの提案

毎日料理を提供するには時間的にも金銭的にも限界があります。そこで、定期的に子ども向けの料理教室を開催し、自分たちで料理を作れるようになる自立性を養う場所として、子どもキッチンを行いたいと考えました。



◇座学

子どもキッチンの内容は座学と料理作りに分かれます。座学では、料理の作り方だけでなく、地域ごとの違いや、食材の知識についても学ぶ機会を作ります。



◇料理作り

ここでは、実際に料理を作りながら包丁の握り方や切り方、調理の仕方などを学んでもらいます。

子ども達のグループごとに担当の学生がつき、一人一人を丁寧に教えて質の高い内容を目指しています。



Activity② | まんぶく合宿

○目的

8月20,21日には草津市北山田町にてまんぶく合宿を開催しました。この合宿の目的は、子供達に食に関心を持つきっかけをつくり、食の知識を身につける機会や学校や学年の違う子ども達の交流の場をすることです。

小学3年生～小学6年生を対象とし、郷土料理作りや農業体験、食器作りなど様々な食に関わる活動を行いました。

◇竹での食器作り



ここでは、実際に竹を使いお箸とお皿作りをしました。切り出し小刀を使い、ナイフの扱いについても学んでもらう機会を作りました。

◇農業体験

近くにある横江ファームにて小松菜の収穫体験をしました。当日はかなり蒸し暑く、子ども達の体験は30分ほどでした。ですが、農家さんは長いときは4時間ぐらい作業をするという言葉で、子ども達に農家さんの苦勞を実感してもらうことが出来ました。



◇ソーセージ作り



ソーセージを、お肉やスパイスなどの材料を元に一から作っていました。ここでは、様々なスパイスの配分を小学生に任せることで、スパイスの種類や量の違いによる味への影響を体感してもらうことが出来ました。

◇グループディスカッション

ここでは、「人はなぜ野菜を食べるのか」というテーマを元に、子ども達にディスカッションをしてもらい、最後に発表をしてもらいました。

子ども達に食に関して深く考えてもらう機会を作ることが出来ました。



Activity③ | 味覚の一週間

味覚の一週間とは、毎年10月の第三週に実施されている味覚の教育活動です。

食のプロフェッショナルであるシェフや生産者が講師となり、小学生を対象に味覚について料理や座学、体験を交えながら行う授業となっています。味覚について学ぶことで味わうことの大切さ、食べることの楽しさを子ども達に学習し、子ども達により伝わりやすい伝え方ややり方を学ぶため、今年度はコーディネーター(授業のサポート、料理人と小学校のコンタクト)として参加しました。



2019年度 学びのコミュニティ 集団形成助成金 成果報告

Threex

📄 団体名の由来

excitement(ワクワク)
 experience(経験)
 excelsior(より高く! 向上!)
 という3単語の頭をとって3つ(three)のexという意味での造語

🎯 活動目標

- ①考える力を養う
- ②自分の感じたことを大切にする
- ③歴史やものづくり、科学等様々なものに触れ、未知の分野に興味・関心を持つ
- ④同じ地域に住む同世代の人とのコミュニティ形成

👥 活動内容

(12月の企画開催がメインであるためそこに向けての活動)

- ・週1回BKCでのミーティング
- ・彦根訪問
- ・協賛金集め
- ・チラシ作り
- ・チラシ配布
- ・企画開催



! 背景

- ①グローバル化やIT化が進む昨今であり、これからは今まで以上に考える力、問題解決力が必要とされるため
- ②つまらないでもおもしろいでも間違いはないのだから“自分で”感じたことを大切にしてほしい
- ③小さいときの経験は一生物であり、今はいろいろなことに挑戦可能なので興味を持った分野を見つけてほしい
- ④同じ地域に住む仲間と協調性を持ち楽しんでほしい

👥 企画成果

企画名: お城を作ろう
 開催日: 2019年 12月14日、15日
 場所: 立命館大学スポーツ健康commons
 市民交流プラザ
 参加費: 無料
 参加人数計: 60名

企画詳細

- ①お城の天守、フォトクロミズムについてのレクチャー
- ②お城(天守)をペーパークラフトで組み立てる
- ③作ったお城の色塗り
色を塗る部分の一部についてはフォトクロミズムという紫外線に当たると色が変わる素材を使用
- ④実際にあるお城を題材にして
お城がなぜそこに建ったのかのレクチャー
ここで後の活動の土台をつくる
- ⑤お城をどこに建てるかをグループで考えてもらう
琵琶湖の南側の地図を3Dのジオラマ化してその中のどこにお城を配置するかを考えてもらう
グループでの活動により協調性を養う
- ⑥なぜお城をそこに配置したかを発表
考えたことを言語化してもらう
- ⑦事後アンケート記入
一般社団法人教育コミュニケーション協会のキッズ作文メソッドを用いて感想を書いてもらう



①の様子



②の様子



③の様子



⑤の様子

📖 反省

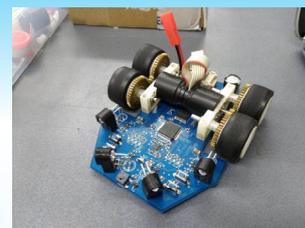
計画の殆どが後ろ倒しになってしまった
 仕事の負担に偏りが出てしまった
 自己アピールの仕方、マナーを考えられるようになった
 参加者が楽しんでくれたことは良かった

→アンケートの一部



立命館大学マイクロマウスクラブ

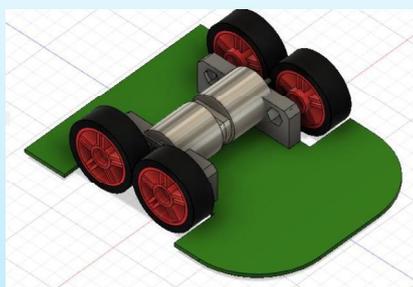
マイクロマウス競技への挑戦



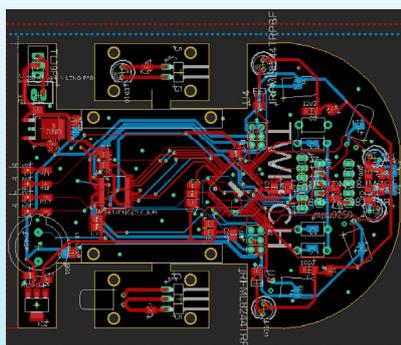
マイクロマウス競技とは

マイクロマウス競技は世界で最も歴史のあるロボット競技で、小型ロボットが自力で迷路を探索し、ゴールするまでにかかる時間を競う高難易度な競技

競技者はロボットの機構、回路、プログラムをすべて自作する



機械設計



回路設計



プログラミング

活動目的

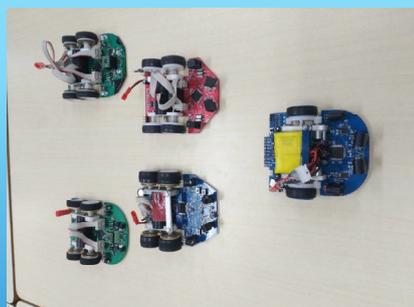
競技を通して技術力を磨く
今年度は迷路探索を成功させることが目標



大会での競技の様子

活動内容・成果

マイクロマウス中部地区大会、全日本学生大会出場
中部地区大会で迷路探索成功
みなくさまつりでロボット展示



大会に出場したロボット



みなくさまつりででの展示の様子



今後の目標

来年度は大会で上位入賞を目標に、団体の更なる技術力向上を目指す

72機体中29機体のみが探索成功

I Mondo Gastronomia

～目的～

食に対するアプローチを様々な角度から行うことにより、
これまで培ってきた食への意識・概念の発展・飛躍を目指す。
さらに食を通じて地域の活性化や文化の理解を目指す。



～成果～

今回の活動では、福井県小浜市に協力していただき「**OBAMA**食のまつり」というグルメイベントに参加させていただく予定であった。
我々は、小浜市で有名な鯖を用いた「サバのトルティーヤ」を作り、出品しようと考えていた。
しかし、衛生的な問題から出品は難しいという結果になってしまった。
今回の経験を通じて我々は、飲食物の売買の難しさや衛生面での認識の甘さを痛感し、食品の衛生への理解を深めることの出来る良い機会となった。



～今後の活動～

食を通じた新たな活動として、今後見込まれるナショナルフード・ローカルフードの広がりなど現在の食問題にスポットを当て、農漁業体験などから、地域の人々との交流を図るグリーンツーリズム活動を行っていく。



ムスリムが抱える課題を解決し、より良い街づくりを目指して

立命館大学学びのコミュニティ集団形成助成金採択団体 ぐるめっぴ

はじめに

2015年に国連で定められた17個の社会問題解決目標であるSDGs(Sustainable Development Goals)は、今では様々な国や地域で取り組まれている。また、SDGsは理念として「誰一人取り残さない-No one will be left behind」を掲げており、SDGs達成のためには一人一人に焦点を当て、あらゆる国や地域から取り組むことが必要である。私たちは、ムスリムが日本人と同じように簡単に買い物やレストランを選ぶようにする環境を作っていく、誰一人取り残さない世界を食の観点から実現していきたいと考えた。国際化が進み、日本に移住する外国人の増加に伴い、この立命館大学にも様々な国からの留学生が来ている。その中でも、ムスリムは宗教上の理由で食べられるものが制限されている。彼らが食べることのできる食品はハラフードと呼ばれ、ハラフードはイスラム教の戒律を守り、調理された食品である。

ハラフードの制限は、各ムスリムの価値観や信条によって異なることもあり、非ムスリムの日本人だけでどの食品が食べられるのか判断するのは困難なうえ、ムスリムからひんしゆくを買うことも予想される。

本プロジェクトはムスリムと共同し、彼らの考えや価値観を取り入れながら進めていった。そこで、ムスリムの方にヒアリング調査を行った結果、彼らは大学でどの店、またどの商品がハラなのかということがわからないという課題が浮き彫りになった。留学生が生活しやすい大学にするにはこれらの課題を解決する必要がある。その解決する一つのツールとしてハラフードマップ作成に取り組んだ。ハラフードマップとはハラフードが販売されている移動販売店や生協食品、カフェテリアのメニューなどをマップにまとめ、大学内でのポスターやHP、SNSで告知し、立命館大学に在籍中のムスリム、またこれから立命館大学への入学を検討しているムスリムへこのマップを広報するためのツールである。そして、実際にムスリムにハラマップを使ってもらい、直接意見をもらうことでより良いツールへと改善させていく。

BKCムスリムフレンドリーフードマップ

2020年1月学内のムスリムフレンドリーフードマップを作成。一目でムスリムフレンドリー取扱店の場所がわかるマップと、食品成分表の記載されたメニュー表の2つから構成することで、より食の選択肢の幅を広げた。



Multicultural BBP Café

BKC校内にてBBP Caféとのコラボイベントを開催。当団体のハラール管理者資格を取得したものによるセミナーや、実際にハラール表記がされたお菓子を用了ワークショップを開催し、参加者全員で多文化共生について学んだ。



最後に

本団体は、多くの方のご協力があり、ここまで充実した活動を行うことができました。本当にありがとうございました。今後共よろしくお祈りします。

国際SDGs Food バトル

ハラールな料理のレシピを各班で考え、実際に調理した料理を食べながら交流をした。イスラム教のお祈り体験や日常体験談のスピーチなどを通して、より交流を深めた。



勉強会、訪問

ムスリムフレンドリー管理者資格が取得できるセミナーにて勉強会に参加しました。また、別府市や東京台東区にて訪問、聞き取り調査を行い、活動に活かしました。



立命館大学 COMARS 活動報告

移動をもっと自由に、たのしく。

私たちの生活は、移動とは切っても切れない関係にあります。そこで、当団体はモビリティ特に自転車による安心・安全なまちを実現するために活動を始めました。主に、立命館大学内の駐輪場の課題を解決するためのサービス開発、安心安全な社会イメージを共有するためのワークショップを開催しています。科学技術イノベーションの普及にあたり、その利用障壁の原因を明らかにしながら「移動をもっと自由で、楽しい」社会の実現に貢献します。

- 安心で安全な街づくり
- 既存サービスとの連携
- 自転車・モビリティシステムの実証実験
- 安全な地域をデータから創る
- モビリティワークショップの開催
- 起業家・技術者へのヒアリング



● 開発メンバー教育の様子 (2019年6月撮影)



● SDGs体験型ワークショップ開催 (2019年8月撮影)



● 大津市モビリティワークショップ (2019年8月撮影)



● 総長ピッチTHE FINAL出場 (2019年1月撮影)

未来社会を共創するワークショップ



サービス・プロダクト

SDGs体験型ワークショップ

～ロボットと考える未来～

8月3日(土)、4日(日)の二日間に渡って、立命館大学 OPEN CAMPUS 2019が開催されました。

その中で、当団体は「ロボットと考える未来」を高校生やその親御さんを対象として企画しました。当日は最先端ロボットを用いながら、将来について参加者の方と一緒に考えました。



EffBOT操縦体験後の様子

ロボットと考える未来

～これからのモビリティと、これまでのまちづくり～

11月8日(金)に、大津市自動運転バス実証実験のサイドイベントとして、本企画を行いました。

大津市未来まちづくり部交通戦略室の長谷川祐介主任の挨拶から始まり、立命館大学財務部契約課課長の久米達也課長に講演していただいた話題提供を元に、ワークショップを行いました。

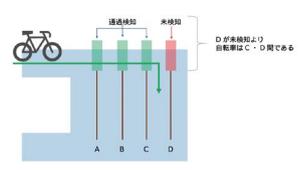


ワークショップ開催時の様子

駐輪場の可視化

～自転車の場所特定、そして効率化へ～

立命館大学の課題の一つである駐輪場の利便性を向上させるために、駐輪可視化システムを製作しています。また、大学内だけではなく将来的には様々な地域で利用できるようにするために、社会実装を考慮した汎用性の高いシステム開発をしています。



システム概略図

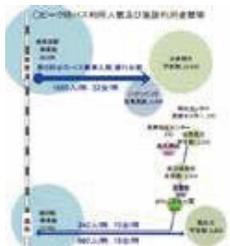
安心して手軽にモビリティを利用する社会を実現する

既存データ オープンデータ 利用データ

ANSHIN システム - データベース
 ・自転車や各種モビリティデータの
 ・一般データとの組み合わせ解析

MaaS データに応用可能

滋賀県の新たな移動に



<https://www.pref.shiga.lg.jp>

滋賀県が進めようとする草津市 LRT 計画を行う上で、バスデータのみならず、競合する自転車データが活用できる可能性があり、これをつなげて安全な社会を目指します。



2019年度 学びのコミュニティ 集団形成助成金採択団体
 〒525-8577
 滋賀県草津市野路東 1-1-1 立命館大学
 びわこ・くさつキャンパス

info@comars.jp

<https://comars.jp>